

NO.324

1995 9

文化庁月報

CONTENTS

特集／10周年を迎えた国民文化祭

座談会 国民文化祭10周年	
三浦朱門／石丸 寛／森下洋子／西澤良之	6
あの熱気と感動から7年—いま、兵庫は	山根淑子 14
お祭りの楽しみを	佐藤陽三 15
10周年を迎え、ますますの発展を	坂谷 明 16
国民文化祭のあゆみ／17 今後の開催予定／21	
第10回国民文化祭・とちぎ95の概要	18

連 載

●随 想／文化のない街	阿川佐和子 22
●地域からの文化発信／博物館・美術館紹介⑥	大和文華館 24
●後世に残そう我が県の文化財⑥／山口県	四季山水図、秋吉台 27
●人間国宝を訪ねて⑩／白磁	井上萬二 30
●芸術文化活動でまちづくり①	新潟県・長岡地域 32
●著作権法講座Q&A／ 6	35

ACA(Agency for Cultural Affairs)NEWS

・平成7年度(第50回記念)芸術祭開催計画決定	36
・国宝・重要文化財の新指定(美術工芸品関係—2)	38

イベント案内

・東京国立近代美術館フィルムセンター「女優 山田五十鈴2」／41	
・第42回日本伝統工芸展／42	
・京都国立博物館「蒔絵」／44	
・東京国立近代美術館工芸館「生活のなかの工芸」／45	
・東京国立博物館「花」／46	
・10月の国立劇場／47	
・表紙解説／編集後記／48	

踊る人が増えていくと、結局長い目で見ると、それが舞踊全体のファンになるんじゃないか。プロ野球のファンというのは、よく見ると、下手であろうとも子どものときに草野球をやった子が、大きくなってプロ野球のファンになっっているんです。

そういう点で、特に全国的な組織ができたとは思いませんけれども、新しい分野ができてきた。第六回の千葉大会では創作オペラとか、そういうふうな傾向が出てきた。これはいいことだと思います。

なまじ全国オペラ協会とか、全国社交ダンス協会なんていうのができる必要はない。ただ、そのような演目があつて、自然に人が集まったり、オペラと一緒にくるうという集団ができた、そういったことはこの一〇年間の成果の一つじゃないかと思えます。

西澤 石丸さんも第一回からご参画いただいているわけですが、何か印象に残ったことがあればお願いします。

石丸 開催県がそれぞれいろいろ個性を持っていて、いろんな思いを国民文化祭にかけてやっていると同じように、我々企画委員とか、実行委員も一人一人の思いを持っていて、必ずしもそれが同じでない。

ですから、これは文化祭にかける僕個人の

思いということではやべらせていただくと、いわゆる祭りというのは大きく分けて二通りあります。一つは両国の花火大会とか、郷土芸能とか、その他いっぱいあります。つまり、一過性の一晩、あるいは一日、時には一週間、みんなでワーツと楽しんで、そこで終わり。ことはあの部分がどうだったとか反省はあっても、とにかくそれで終わり。

国民文化祭はそうではなくて、もちろん一過性の総力を挙げて楽しむ国民のお祭りという要素も当然あつていいわけですが、その県の生活文化状況への一つの反省、AならAの県がこれからどうしたらいいかという、反省材料になつてほしいという思いが僕には強いんです。それで、いつの日か経済大国が文化的大国でもあるようになってほしい。そのための国を挙げての国民文化祭ではないかという思いがあります。

僕も一〇年間関係させていただきましたが、その立場から言いますと、どの県も一過性のお祭りをやることに大変なエネルギーを取られてしまう。それぞれいろいろの理想をお持ちでしようけれども、実際にスタートしてみると大変なことで、時々僕は練習に伺ったりしますから、そのプロセスを横で拝見していますと、もう本当に大変なんです。

ですから、問題がまだ残っています。国民文化祭というのは一体何だろう。コンセプトみたいなものについて、一人一人の委員には別々の思いがあるでしょうけれども、他県への対抗意識とか、一過性の盛大さではなく、将来への目標を持つてやる必要がある。ただ大変なお金とエネルギーを使って一過性のお祭り終わらせたくない。

では、どうしたらいいか。たぶん、各分野の指導者の育成という問題が大きくクローズアップされてくるわけです。今までの一〇年間の僕個人の反省は、今お話ししたようなことです。

国民文化祭へのプロの参加

西澤 森下さんは昨年の三重大会の洋舞フェスティバルに特別参加していただいたわけですが、どんなご印象をお持ちになりましたでしょうか。

森下 クラシックバレエという日本ではなかなか育ちにくかつたものを、東京だけでなく、地域地域の先生方が一生懸命いろいろ努力してやってくださっているというのを、一緒に出させていただいてすごく感じました。みんなが一つになつていいものをつくらうという

10年を
振り返ると……

西澤 本日はお集まりいただきましてありがとうございます。



国民文化祭10周年

三浦朱門

座

石丸 寛

談

森下洋子

会

西澤良之(司会)

三浦先生がご提唱されて始まりました国民文化祭は、昭和六一年の第一回から回を重ねまして、ちょうどことしの栃木大会で一〇回を迎えます。まず、この一〇年を振り返って、どんなご感想をお持ちか、お話を伺いた

と思います。第一回以降、実行委員会の会長をしていただいております三浦先生からお話をいただければと思います。

三浦 最初のころは、どうしても全国的な組織ができていところに声をかけて参加をお願いしたわけです。そういう場合に、何といつても伝統的な芸能の場合は、全国組織がわりとよくできていたんで、それに乗ることができました。

同時に、より近代的な芸術の場合は、本来的に芸術というのは無政府主義的なところがありますから、バラバラで形をなしていないところがあった。西欧的な芸術で組織があったのはコーラスぐらいのものだったと思うんです。

考えてみますと、第四回の埼玉大会のときに社交ダンスというのが入ってきたんです。私はこれは「大宮の駅前広場で、下がコンクリートだつて何だつて構わないじゃないか、一万人でも、二万人でも踊ろう」と言ったんです。これは基本的にだれでも参加できるんです。そのような広がりの上に、いわば高い峰としてバレエがあるわけです。それから後、社交ダンスをやるところが多くなってきました。それは全国的な組織なんていうのはないかもしれないけれども、参加する人が増えて



みうら・しゅもん／1926年東京都生まれ。48年大学卒業後、作家活動を開始し、端正な作風で『聖徳勲章』『武蔵野インディアン』『箱庭』など優れた作品を世に送り出す。83年芸術選奨文部大臣賞を受賞。85年文化庁長官に就任、国民文化祭を提唱する。翌年退任後も実行委員会の会長として国民文化祭の発展に尽力。

つたと思うんですが、だんだん町ぐるみでやるようになった。立派な音楽家が棒を振ってくれて、日本を代表する歌手が歌ってくれて、その中に自分が入ったという充足感はとても大きなものだと思うんです。私どもが国民文化祭で考えた一番もとにあるものの一つが、石丸さんの「第九を歌う会」だったですね。石丸 国民文化祭が始まる前に、当時文化庁

長官でいらした三浦さんとお会いしまして、ああいうふうなアマチュアとプロが一緒にあって、すばらしい音楽ができるという状況がなかなか日本ではない。ヨーロッパではすばらしいコーラスがあるけど、ほとんど全部アマチュアで、それがプロのオーケストラと一緒にいってもルネッサンスやバロックの音楽なんかをやっているわけです。だから、アマチュアとかプロという垣根をとって、国民文化祭という形でやりたいと思っているけど、どうだろうっていうお話を伺ったんです。

一つの問題点は、日本ではプロの人がアマチュアとの間に境目をつくって一緒にやろうとしない。ところが、ヨーロッパに行ってみますと、いいプレーヤーだとアマチュアだろうがプロだろうが関係なく、三人か四人で一緒にやって楽しむ。

それで気がつくことは、日本では、例えばギターの世界には「ギター界」という言葉がある。「合唱界」、「吹奏楽界」とかいて、みんな別々に垣根があるわけです。なかなか一緒にやらない。ギター界の先生は、その世界で一国一城のあるじなんです。こういう仕組みは、日本の音楽文化の中で一つの弊害になっています。そういうことは正も国民文化祭の一つのテーマで、合唱とブラスを一緒に

にして、つまり吹奏楽界と合唱界を一緒にして、楽しい一晚のコンサートをやったりしましたね。垣根を壊して、だれでも同じように楽しめて、同じように音楽に接されるという状況が日本にはまだ不十分だと思います。僕らプロにも責任があると思いますけども。三浦 日本の芸術家は、狭い意味での伝統の枠の中にいるか、あるいはヨーロッパ風の文化だとあまりにも向こう側ばかり向いてはいないか。バレエでいうと、いい舞台はほとんどヨーロッパでつくっていて、日本で森下さんが仕事をしようにも、それを支える人材が周りに数えるほどしかない。やはり人材を育てていかなければ日本は文化をつくっていくけない。そのためには、どんなにプロから見ればレベルが低かろうと、その人たちの活性化するよりよい方がないと思っただけです。森下 それは本当にそうだと思います。一人二人でできるものではないですからね。一番底辺の基礎になるところを広く緻密につくっておかないと、必ず壊れてしまいます。表面的なものだけでなく、あつという間に崩壊してしまうというのがありますからね。三浦 ヨーロッパの舞台は、本当に隅々までそれなりのレベルですよ。森下 そうなんです。

さつき三浦先生が、ソーシャルダンスから始めて、みんなが踊りをわかってくれるようになってくださったとおっしゃいましたが、本当にそういう気持ちを持ってやってくださると、日本のバレエもすばらしくなっていくのではないのでしょうか。これだけの大きい組織でやっていただけるチャンスが少しずつでも増えていけば、と感じたんです。

森下 石丸さんも森下さんもそれぞれ専門の立場から見ると、意に満たないところがたくさんあると思うんですけれども、私は自分で言い出したから自画自賛みたいですけど、皆さん方のご協力が実を結んでいるとは思っています。例えば、森下さんが東京から来て真ん中で踊ってくださるという、平生のライバル意識なんかよりもとにかく私も出たいという気持ちになれる。そのような気持ちをつくってくださったという意味で、プロの代表的な方が参加してくださったことは大きな意味があると思うんです。本当に森下さんに参加していただいて、私どもはともありがたいと思っています。

森下 皆さんの熱意がものすごく感じられたので、こういう場をなるべく多く国のほうでもつくっていただけたら、基盤もできてくるし、レベルも上がってくるし、もっと広く文化に対しての興味が出てくると思うんです。やはり経済だけではなくて、文化に対して興味を持っていただきたいし。去年、三重県には新しい劇場ができたんで



いしまる・ひろし／1922年中国・青島生まれ。39年日本に移り、山田一雄に師事し、指揮法、管弦楽法を学ぶ。50年に九州交響楽団の設立に参加、初代常任指揮者となる。NHK交響楽団、東京交響楽団でも指揮をとり、国民文化祭では実行委員・企画委員をつとめる。現在は東京交響楽団評議員、九州交響楽団音楽総監督、玉川大学客員教授。

すね。すばらしい劇場でしたよ。こういう大きな会があると、それに見合う劇場もつくって頑張っていかなければということが出てきますよ。

プロとアマの垣根、分野の垣根

西澤 今お話にあったような文化全般の状況で見て、どんなことをお考えでいらつしやいますでしょうか。

三浦 お役所の好きな言葉で「基盤整備」という言葉がありますけれど、そういう意味で石丸さんがなさったお仕事はとても大きいと思うんです。石丸さんが東京の墨田区で「五千人で第九を歌う会」をやられて、日本の代表的な四人の歌手が出てくださる。最初は何となくコーラスに関心のある人たちが中心だ



中間指導者の育成

つくつていく。それがすばらしく、またお客さんが喜んでくだされば、また自信につながつていき、次の段階に進んでいけるから、日本人は日本人としてきちっとやっていくべきだと思うんです。

西澤 プロの人たちとアマチュアの関係とか、地域での指導者の育成とか、また指導的な立場の人たちがどう参画していくべきかということについて、いかがでしょうか。

三浦 美術の場合ですと、三重県の主催なら何といっても県内の応募者が多いです。それ



もりした・ようこ/1948年広島県生まれ。3歳から地元でバレエを習い始め、59年に橋秋子の内弟子に。71年松山バレエ団に移籍。正確なテクニックと演技力で注目を集め、74年/バレエ国際コンクールで金賞を受賞。日本を代表するバレエナとして国内外で活躍中。第9回三重大会で特別出演。

を見る、〈あ、これは絵を勉強した人だ〉と思うのが大半なんです。よく考えると、中学、高校の絵の先生というのは、中学、高校の数だけいらっしやるわけなんです。

絵ばかりでなくて、音楽でもあると思うんです。音楽というのは、教育を含めて、大学を出る人は毎年何千人もいらっしやるって聞きます。

実はこのような人たちが、大指導者ではないにしても中指導者になってもらってもいいはずなんです。私は変に学校の組織にしたい気持ちはあるんですけど、絵の先生たちの連合会とか、音楽の先生たちの連合会とか、地域のレベルを上げるための集まりみたいなものができてくれば、それが恐らく中クラスの指導者になっていくんじゃないか。体育大学を出た女の先生の中でも、モダンバレエをやったことがあるとか、モダンダンスをやったことがあるという人は必ずいるはずなんです。その人たちが一歩外へ出てくれ

れば、地域の指導者になり得ると思うんです。そのような人は、少なくとも能力のある後輩を見分けることはできるはずなんです。「この人は能力がある」「あなたバレエをやりなさい」「あなたはピアノをやりなさい」ということを言える人だと思っんです。だから、何とか学校の先生クラスの人たちがもっと活発に動くような場を自治体はつくつてほしいと思います。

西澤 バレエの分野ではいかがでしょうか。森下 やつぱり年功序列というところが結構ありますから、何々バレエ協会とか、その地域のバレエ協会の会長さんは一番年上の方で、他の人はあまり意見も出せなくなっている状態がありますけど、国の催しでこういうものがあると、一番上の偉い先生だけでというわけにはいかないので、やつぱりみんなが一つになつてやらなくてはできないんだという意識はすごく持ってるんです。

私がこの間出演したときには、若い先生方が、ほとんど中心になつてやつてらしたから、すごく私は心地よい、さわやかな感じを受けました。そういうことがこれからなくてはいけないと思うんです。そうじゃないと、日本のバレエも育つてこないし、そういう意味で非常にうれしい思いをしました。



国民文化祭を地域文化振興につなげて

石丸 国民文化祭が、気がつかないで一ついいことをしていると思うことがあります。地方の指導者というのはライバル意識が強く、弟子がみんな戦々恐々としている。

例えばバイオリンの先生がいます。Aの先生についている弟子は、Bの先生のところにはどうしても行けないんです。行くと、どういふひどい目に遭うかわからない(笑)。すごいライバル意識があるんです。

それが国民文化祭で、まちのバイオリンストや音楽家が一緒になつてやっていることで、少しずつそういふかたくなな状況が壊れてきつつあるのを幾つかの会場で感じました。これは国民文化祭の本来の目標とか目的とは関係なく、一方では非常にいいことをしていると思つています。

西澤 今お話しのように、日本全体の文化レベルを高める働きもあると思っすけど、一方で独自の地域文化を振興する動きも出てきています。そういう地域文化という観点からはいかがでしょうか。

三浦 第五回の愛媛大会のときに感じたんですが、あそこは東部・中部・南部ではもと

もと殿様も違えば、環境もかなり違うんです。全然別だったんです。それで初めて違う地域のお祭りを見たという人がいっぱいいたんです。だから、一つの県といつても、実は地域的にバラバラなんです。それが一つになつてするということ、その媒体が音楽であろうと、コーラスであろうと、あるいはお御輿を担ぐことであろうと、民謡を歌うのであろうと構わないんです。その意味で、地域の間の交流は盛んになるんじゃないかと思っす。

石丸 「地域」という言葉の意味ですが、例えばヨーロッパには、「コミュニティ・オーケストラ」という言葉がありますが、日本では、地方のオーケストラというのはみんな東京に顔が向いているんです。日本には「中央」という言葉がありますが、ドイツではベルリンが中央でもなければ、オーストリアではウィーンが中央でもなくて、至るところにすばらしいオーケストラや文化があるわけです。日本ではみんな顔が東京を向いてますので、本当の意味での地域の文化がなかなか育ちにくいんです。少しずつよくなつていますが。たとえ人口二〇万の町でも、おれの町という気持ちで、きれいな木を植えようとか、きれいな音楽をつくりたいとか、そういう感覚がちよつとなつてい



西澤文化庁文化部長

森下 私はわりと純国産品なんですよ。文化庁の在外研修はさせていたたいたんですけど、子どものころに外国で勉強した機会は、二、三カ月前アメリカへ行つたぐらいなんです。また在外研修で一年間行つていたというのも、二五歳を過ぎてからのことなんです。今は何でもかんでも、とにかく外国へ行けば何とかなるんじゃないかって思つて行っちゃう方も多いんですが、決してそうではなく、行つても行かなくても勉強してる人もいるし、行つたからといって、すごく身につくかといえはそうでもないんです。

そういう意味で、日本人だけで、例えば地域の先生方が一つになつて、こういうものができたというのは自分たちの自信にもつながってくるし、初歩の初歩の人たちからそういう舞台に出るチャンスをもつて、みんな



自分の美意識に 誠実になる

西澤 生活文化の活性化と国民文化祭という観点で、何かご感想がございますでしょうか。三浦 「生活文化」という言葉は、劇作家の山崎正和さんが言い始めたんだと思うんですが、これは日本の近代の新しい傾向だと思うんです。

文化というと、我々は学問・芸術であってヨーロッパやアメリカの進んだもの、芸術を学んだ、そしてそれを鑑賞するんだというので、まるで勉強するようなつもりで、全然楽しまずにバレーでも音楽でも受けとめてますね。でも、彼らにしてみたら、ドイツの哲学用語は、日常使っている言葉を哲学用語に使ったにすぎないんで、それと同じようにバレーにせよ、音楽にせよ、演劇にせよ、美術にせよ、ごく普通の生活感情の中から出てきたものなんです。その基盤というものは衣食住の美意識……美意識と言つとまた面倒ですけど、おいしいものとか、少しでもきれいなものとか、おもしろいものとか、そういうものに對する欲求があつて、それを満たすものとしてこういうものが発達してきたわけなんです。

その点、私たちはいわば木に竹を接ぐように、既に完成された向こうの芸術を学んじやった。文字どおり学んだわけです。そこに問題点があるんです。

したがって、生活文化と言いましたけど、自分たちの生活について、朝、何を食べたいか。同じものでも、こちらはコーヒーに砂糖を入れるのが好きで、わが配偶者は砂糖なしのコーヒーが好きとか、そういうことから始めて、自分の好みに対して誠実になる。自分の好みに対して誠実になつていくときに、自分の好きな色、自分の好きな音、自分の好きな動き、身のこなしというものがあつて、その頂点として音楽があり、美術があり、踊りがある。その意味で、自分の好み、欲求を掘り返さなければならぬ。

だから、国民文化祭というのは、究極の目的は一人一人の心の中にある欲求というか、美意識というか、好みというのか、それに対して誠実になることを期待したいという気がするんです。

西澤 森下さんはいかがですか。

森下 私は三浦会長のお話を聞いていて、やっぱりどの分野も同じだと思うのは、自分に誠実になるということはすごく大切なことだと思うんです。私は踊りしか知らないけれど

と同じようなものになつてしまふことは避けがたいと思うんです。ですけども、それぞれの県がそれぞれ一品だけでも新しい料理をつけ加えてほしいと思います。

もう一つは、その地方に全国から集まるということに意味があるわけです。そのときに自分の地方性がわかる。東京からプロの偉いスターが来るだけではなくて、東北で言いますと、九州の人もある、四国の人もある。「うちの民謡と四国の民謡と似てるじゃないか」とか、「こんなにも違うか」とか、そのような出会いも重要なことだと思うんです。主催県がよその地域を知ることともまた大きな成果だろうという気がします。

西澤 今後に期待するものということで、森下さん、いかがですか。

森下 私は昨年、出演させていただいたのですが、感じたことは、なるべく幅広く多くの方が参加できるような形で、長く続けていっていただきたいと思うんです。決まりきった方だけが出演するというんじゃないで、みんなが参加できるような形でやっていくことはすごく意義があることではないかと思つています。

西澤 石丸さん、いかがですか。

石丸 一番最初に申し上げたように、自治体

も、誠実になつてやっていかないと、道は開けていけないんじゃないかという部分があります。下手とか、未熟だとか、外国のものだからとか、そういうものではなくて、自分に問いかねながら一つ一つ見つけていくながらやっていくということで、未熟なりにも少しずつ道が開けてくると思うんです。自分なりにそれに対して誠実にやっていくことが一番すばらしいことじゃないかと思うんです。

西澤 それこそ心の豊かさということにたぶんつながってくるんじゃないでしょうか。

石丸 森下さんはいかがですか。

石丸 僕の結論は、三浦会長のおっしゃったことと全く同じですが、結局、国民文化祭を通して、堅苦しい言い方をすれば、日本の長い文化史、日本人という体質をつくった文化の歴史に気づいて、国民の文化に対するナイーブな認識をつくっていくいい機会だと考えたいんです。生活文化としての芸術というナイーブなものを起点とした立ち上がりにつづくことですね。もつと自然なものの見方、生き方で文化を享受する新しい体質……もちろん僕らは与える側ですけども、両方を通じて新しい文化国を作りたいという契機を国民文化祭で感じあつていきたい。

僕らは小学校のころから、教育というのは

が一過性のものと受け取らずに、大変なイベントだということは重々僕もわかっていましたけれども、終わった後に「ああ、終わった。終わった」だけじゃなくて、自分たちのコミュニティの生活文化として、これから何をどういうふうな改良していこうか、何を組織立てようかという宿題を感じてほしいんです。それが僕のお願いです。

西澤 具体的にはどんなことに心がけて、それぞれの開催県が物事を考えていくということになるんでしょうか。

石丸 問題点はたくさんあると思います。さつきお二方が同じことをおっしゃつてましたけど、そこにはいろんなマテリアル、すばらしい素材が決してないわけじゃない。その方たちと一緒になつてもらったときに、強力な何かを生む力ができるんだと思います。指導者が一国一城のあるじでお互いにライバル意識をもっているようなことも解決していかなくてはいい問題でしょう。いろいろありますけれども、とにかく一過性のお祭りです。終わらず、魅力的な「我が地方文化」を更に前進させるスタートラインにしてほしいですね。

西澤 きょうはどうもお忙しいところをありがとうございます。



今後の国民文化祭の 在り方

ただ、あれをしちゃいけない、これをしちゃいけない、これは黄色いものだ、これは辛いものだ、これは甘いものだというふうに、すべて観念で教わつてきましたからね。とてもそういう体質からは、文化的な個性、魅力は生まれなと思うんです。そういうことに気づきたいと思います。

西澤 どうも我々はややもすると、芸術とか文化というのはこつちにあつて、毎日の生活はこつちにあつて、何か違う、かけ離れたものという感じがしますけれども、おっしゃるように、そこを一体のものとして感じ取るように、生活そのものを、考え方そのものを変えていく、そういうことになるんでしょうか。

西澤 既に、今後の国民文化祭のあり方にも踏み込んだお話が何点かございましたけれども、今までのお話を踏まえて、こんなふうにしていったらどうかということを、具体的にそれぞれお話しただけるとありがたいと思

います。三浦会長、いかがですか。

三浦 私はそれぞれの主催県が主導権を持つべきだと思います。そうすると、結局、定食めいたものが中心になる。宿屋さんのメニュー

表紙解説 特別史跡姫路城跡

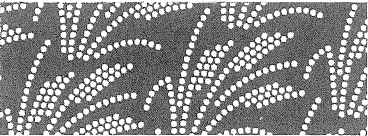
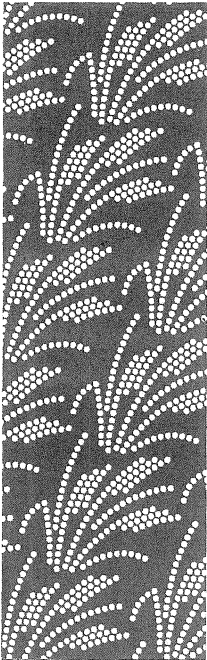
姫路城は、関ヶ原の合戦の戦功によって播磨国52万石を与えられた池田輝政によって慶長6年（1601）に着工され、足掛け9年の歳月をかけて築城されました。

大天守を中心に東小天守・西小天守・乾小天守などが配置され、白壁で統一した優美な外観から白鷺城の別称があります。

姫路城は、代々の城主によって修理の手が加えられ、特に明治・昭和の大修理をへて、今日に木造建築群と城壁、土堀から構成される城の構造がよく残されており、17世紀初頭の日本の城郭を代表するものです。平成5年12月には日本最初の世界文化遺産に登録されました。

大正元年（1912）には、姫山公園とともに姫路城も一般公開され、市民の憩いの場として親しまれてきました。現在、城周辺整備が精力的に進められ、市立日本城郭研究センター・美術館・文学館など充実した施設が整い、文化の香り豊かなゾーンを形成し、また姫路城三の丸広場やその周辺では、季節に応じて観桜会・花見太鼓・ゆかた祭り・お城祭り・観月会・新能など多彩な催しが行われ、多くの市民や観光客が訪れています。

（姫路市教育委員会文化課長 北野豊功）



編集後記

残暑きびしい日々が続いていますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。この時期になるといつも、夏休みの宿題、ことに絵画の宿題に苦労させられたことを思い出します。

ところで、皆様は、写生画とポスターのどちらが得意でしたか？色使いの基本として、写生画は「複数の色を混ぜ合わせて、より表現豊かな色を」、ポスターでは「色が混ざらないように原色のままだの色を」というふうに教えられました。

地域文化や国民文化祭について考えていたとき、何気なくこのことを思い出しました。地域にはそれぞれ独自の「色」をもった文化が存在しています。その文化の中には、他の色と並べることによって、ますますその色が映えるものもあるでしょう。その文化独特の色が変質して失われてしまわないようにすると同時に、色を混ぜ合わせることによって、新しい色彩を創造する必要があります。

「写生画とポスターの両方を同時に作成する必要があるのかなあ。うん……ますます難題だ」。ふとそんな取り留めのないことを考えてしまいました。

（か）

文化庁月報 9月号（通巻324号）

平成7年9月25日印刷・発行

編集—文化庁
〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行—株式会社ぎょうせい
本社 〒104 東京都中央区銀座7-4-12
本部 〒167-88 東京都杉並区荻窪4-30-16
電話 編集 03(3571)2126
販売 03(5349)6666
振替口座 00190-0-161

印刷所—㈱行政学会印刷所

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価530円（本体515円）送料76円
年間購読料6360円
本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
㈱ぎょうせい営業第一課宣伝係
電話03(5349)6657（ダイヤルイン）
©1995 Printed in Japan
ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。